

論文要旨

HBc 抗体陽性が、C 型肝炎ウイルス高感染地区における HCV 感染者の
長期予後に及ぼす影響：日本における地域住民対象のコホート研究

坪内 直子

B 型肝炎ウイルス (HBV) 表面 (HBs) 抗原陰性で HBV コア (HBc) 抗体陽性は、HBV 潜伏感染者であると考えられる。HBV 潜伏感染は、C 型肝炎ウイルス (HCV) 感染者の肝発癌などに影響する可能性が報告されているが、未だ一定の見解は得られていない。そこで、学位申請者らは、HCV 高感染地区住民を対象とした約 10 年間のコホート研究で、HCV 感染者の肝発癌に加え、肝疾患関連死、肝線維化の進展も含めた臨床経過に、HBV 潜伏感染が及ぼす影響について検討した。対象は HCV 抗体陽性率の高い宮崎県 C 町において、HCV 抗体陽性かつ HBs 抗原陰性の 400 例である。

その結果、本研究で以下の知見が明らかとなった。

- 1) HCV 抗体陽性かつ HBs 抗原陰性者 400 例のうち、HBc 抗体陽性率は、HCV キャリアで 53.6%、HCV 既感染者では 52.6%であった。HCV キャリアでは、HBc 抗体陽性群は陰性群に比べて高齢であったが、その他の背景因子には差がなかった。
- 2) 肝細胞癌 (HCC) を発症した人数は、HCV キャリアでは 263 人中、HBc 抗体陽性において 22 人、HBc 抗体陰性において 13 人であった。多変量解析すると、年齢 65 歳以上、ALT 値 31 (IU/L) 以上が HCC 発症に関連する独立した危険因子であったが、HBc 抗体の有無は HCC 発症に関連しなかった。
- 3) 肝疾患 (肝癌、肝不全および食道静脈瘤破裂) に関連した死亡者数は、HCV キャリアにおいて、HBc 抗体陽性群は 17 人、HBc 抗体陰性群 16 人で、Log-rank 検定では、両群間の累積生存率に差はなかった。多変量解析では、年齢 65 歳以上、ALT 値 31 (IU/L) 以上が肝疾患関連死の独立した危険因子であったが、HBc 抗体陽性の有無は危険因子ではなかった。
- 4) 2001 年と 2004 年の血清アルブミン (Alb) 値と、肝線維化の指標である血小板数、ヒアルロン酸、IV型コラーゲン 7S を、HBc 抗体陽性群と陰性群間で比較すると、いずれの年も 2 群間で有意差はなかった。
- 5) Alb 値、血小板数は、HBc 抗体陽性群、陰性群ともに 2001 年と 2004 年で変化を認めなかった。一方、2004 年のヒアルロン酸と IV型コラーゲン 7S は、2001 年に比べて HBc 抗体陽性群、陰性群ともに有意に上昇したが、その上昇には HBc 抗体陽性の有無は影響しなかった。
- 6) 2004 年に 144 人の HCV キャリアを対象に FibroScan を用いて肝線維化を評価した結果、測定値は、HBc 抗体陽性群では 8.48 (KPa)、HBc 抗体陰性群では 8.51 で、両群間に差はなかった。